

2026年7月28日

T.Kobayashi

今年も名古屋は荒れ模様
激暑の夏の 大相撲観戦日記

今や大相撲の世界には序列はあってないような状態。縁があって上位に立ったからと言って、その人が強いわけではない。便宜上序列が付けられてはいるものの、看板のためのようなもので、毎場所の15日間の取り組みはそれとは関係なく行われ、誰がどんな順位になるかは誰にもわからない。

そこまで開き直って15日間を眺めると、新しく見えてくる景色があるのかもしれない。

前半戦は、「この日良い相撲をとったのは誰か？」に注目して、毎日の殊勲賞・敢闘賞・技能賞として並べてみることにした。但し、各力士が星勘定を頭に置いて実のない取り口を見せる可能性がある後半戦は無意味なので、前半戦だけとした。

- 初日：再入幕した尊富士が体格で上回る金峰山を攻めまくる相撲は久しぶりに見た「尊富士相撲」だった。関脇となった熱海富士が豪ノ山に相撲をとらせないように、腰を落としてやや前傾で先に先に動きながら「豪ノ山の型」を殺していくプロセスが、技巧的に感じられた。こういう取り口が15日間続かないと言うのが熱海富士、今場所はどうか？
義ノ富士は大の里を素早い相撲で土俵外に運び、対戦成績を2-0（他に不戦勝1）とした。攻め所が解っているのか、対戦前から自信たっぷりの表情だったが、横綱の表情は最初から「負け」を語っているような表情だった。腰高で、二三步攻め込むとすぐに「はたき」に入り、自ら墓穴を掘った。腰の構え・手と足の動きの非同期・表情（覇気）を見ると、横綱は今場所も「悪い状況」と見えた。
本日の殊勲賞は義ノ富士、技能賞は熱海富士、敢闘賞は尊富士という印象だった。
- 二日目：若ノ勝・藤青雲などの新しい力が活気ある相撲で盛り上げているのが良い。若ノ勝が朝乃山と互角に渡り合って寄り倒した相撲は内容が充実していた。正統派・技巧派同士の取り組み安青錦・美ノ海戦は見応えがあった。美ノ海のきちんとした手順での果敢な攻めを、安青錦がきちんとした手順で裁いたという印象で、本日一番の相撲だった。大の里は予想通り藤ノ川の攻めに抗しきれず敗退。腰が下りていなく、何をやっても力にならない感じて、大の里の先はまだ暗闇。霧島が、淡々と自分の相撲を取っているのが目についた。
- 三日目：体を活かして果敢に前へと進む藤凌駕の取り口に注目が集まってきた。40歳間近の高安が粘り強い相撲で3戦全勝。身のこなし方が力強く、若々しい。藤ノ川は豊昇龍の素早い攻めに、あっという間に土俵を背にしたが、一瞬の身のこなしでまたも金星。
- 四日目：今日も若ノ勝の自信にあふれた前進相撲が、ベテラン御嶽海をしのいだ。義ノ富士・安青錦戦は双方ともに持っている力を出し切った攻防の末、義ノ富士が征した。豪ノ山は大の里の引き技に乗じて突き進み、金星を獲得。今場所の大の里は、攻撃を二呼吸続けると引きの動作に入る。攻めがそれだけしか継続できない状況のようだが、真の原因は「心」か「体」か？
霧島の落ち着き払った、足腰の位置が定まった取り口が、期待を感じさせる。
- 五日目：脇目も振らず、一直線に自分の押し相撲を貫く若ノ勝がだんだん目立ってきた。若手の台頭が著しい幕内の土俵で、高安の動きは今日も機敏で、23歳の藤凌駕を遥かに凌駕するものだった。霧島は迂闊な取り口で墓穴を掘り、平戸海に予想外の完敗。結局序盤を5戦全勝で抜けたのは、平幕の若ノ勝と獅司の二人だけだった。

- 六日目：藤凌駕と若ノ勝の取り組みは、若手二人が自分の相撲をぶつけ合って、全力を出して戦った熱戦。藤凌駕が軍配を得たが、一方の若ノ勝は膝を痛めて車椅子での退場になった。勝った方には技能賞を、負けた方には敢闘賞をあげたい、と思うような一番だった。豊昇龍は伯乃富士に中に入られてしまい、窮余の一策としてチョンがけを繰り出したが、伯乃富士に切り返された。
- 七日目：高安が相変わらずよく動けていて、良い結果につながっている。尊富士が阿武剋を下した相撲は流れがとてもきれいだった。中日を前にして全勝はもういなくなり、先頭集団には、1敗で霧島・安青錦・琴栄峰・高安・錦富士・尊富士・獅司の七人が並んだ。
- 中日：淡々としかも果敢に相撲を取り続け、いつの間にか7勝1敗で先頭集団の中にいた、という感じがするのが、獅司と琴栄峰。獅司の相撲はやや変則的で、体の大きさを持て余しているような気がしていたが、先場所あたりから少しずつ変わってきた。相撲の基本を身につけてきたように攻め方が上手くなってきた。琴栄峰は新入幕から三場所目、柔軟に何でもこなすタイプの力士だが、「自分の強み」を磨きだすと、大物になるかもしれない。先頭集団は、1敗で霧島・安青錦・琴栄峰・獅司の四人になった。霧島と安青錦が引っ張っていく形になるとさらに緊張感が増して、面白くなると思うのだが……。

	本日の殊勲賞	本日の技能賞	本日の敢闘賞	殊勲賞の犠牲者
初日	義ノ富士	熱海富士	尊富士	大の里
二日目	藤ノ川	安青錦	若ノ勝	大の里
三日目	藤ノ川	藤凌駕	高安	豊昇龍
四日目	豪ノ山	義ノ富士	若ノ勝	大の里
五日目	平戸海	若ノ勝	高安	霧島
六日目	伯乃富士	藤凌駕	若ノ勝	豊昇龍
七日目	熱海富士	尊富士	高安	琴櫻
中日	—	—	獅司	

- 九日目：獅司と琴栄峰はのびのびと自分の相撲を楽しんでいる感じで、1敗を堅持。霧島・美ノ海戦は見応えがあった。立ち合いで鋭く突っ込んだ美ノ海が左で前みつをとり、最後までこれを離さなかった。霧島はこれを抱えてきめるしか手がなく必死にこらえながら反撃を続けたが、土俵際で、美ノ海は飛び上がりながらの突き落としという奇手に出た。物言いがついたが美ノ海が勝った。「左前みつ」と「土俵際の粘り」は美ノ海の「看板」のようなもの、これの餌食になった霧島の相撲は、質的に厳しい評価を受ける可能性がある。安青錦は、大の里の突き起こしに臆するところなく低い位置から繰り出す上手出し投げで横綱を転がした。テレビ画面のスローモーション再生でもはっきり確認できたが、安青錦の左足が土俵の砂をつかみきれず、二本ぐらいの指が逆転していた。大けがに至らなければ良いが……。 (今場所の土俵は表面が柔らかいようにも見えるが、事実関係はわからない) 次の取り組み(結び)で、豊昇龍が義ノ富士の果敢な反撃に対応できず、思わず引きに出た一瞬をとらえた義ノ富士に凱歌が上がった。今場所の画面を見ている限り、攻防の中で「引き」の動作に入った(入ろうとした)力士は殆どが敗れている。
- 十日目：朝乃山の「これが朝乃山の右四つ相撲だ」と言うような取り口が続いている。若手藤青雲を退けて8勝2敗。今場所活躍した若手の代表格である義ノ富士が、豪ノ山の突き押し一直線相撲に全く歯が立たなかったのは面白かった。

安青錦は昨日の大の里戦で痛めた左足をテーピングで固めて土俵に上がったが、細かな所作を見る限り重心をかけられない状況は明らかだった。立ち合いの踏み込みは殆どなかったが、左前みつとりは早かった。豊昇龍のすくい投げを上手投げで打ち返して9勝目を上げた。横綱が安青錦の足の状態を見て「立ち合いの攻めを迷った」ようにも見えたが、これはあくまでも私の勝手な想像。

かくして、安青錦・琴栄峰が9勝1敗で先頭に立ち、霧島・高安・朝乃山・尊富士・獅司の5人が後を追う形になった。7人の内4人が元大関、というのも面白い。

- 十一日目：尊富士は朝乃山の巧さを封じるスピードで攻め勝って9勝2敗。高安が伯乃富士にとられたまわしを切って、一方的な勝負で勝ち9勝2敗。琴栄峰は獅司の粘り強い防戦に敗れて2敗に後退。賜杯争いには関係ないが、義ノ富士・美ノ海戦は両力士が良い所を出し合った熱戦になり面白かったが、義ノ富士の巧さより美ノ海の巧さの方が勝ることが見えた一番だった。安青錦は、昨日よりテーピングを薄めにしていたので、いくらか回復してきたのか。土俵上の所作を見る限り、良くなっているようには見えなかった。立ち合いの低い一歩目で左前みつを取り、豪ノ山に相撲を取らせなかった。これで10勝1敗、大関への復帰は可能になったが、本人が目指しているものは優勝に違いない。霧島は一山本を征して9勝2敗を堅持。

10勝1敗は安青錦だけ、9勝2敗で追うのは霧島・琴栄峰・高安・尊富士・獅司となった。

- 十二日目：獅司は朝乃山の秀麗な右四つをねじ伏せた。神懸りのような空気をを感じる。2敗同士の尊富士・高安戦は、高安のかち上げをかわした尊富士が上手投げで勝利。安青錦は痛めた左足が、まったく踏ん張れない状況のようで、琴栄峰の軽いいなしに付いて行けず敗退。左足はかなり重症のように見えた。霧島は大の里のかいなを取ってとったりで10勝目を上げた。安青錦が敗れたことにより、先頭集団は2敗で霧島・安青錦・尊富士・獅司の4人が並走することになった。これから始まる直接対決でどんな展開になるか？ 尊富士・獅司の直接対決は既に済んでいるので、十三日目の霧島・安青錦戦が分岐点になるのかもしれない。

- 十三日目：安青錦・霧島戦は今場所の目玉であり、賜杯争いの行方を見るのにも重要な一番ではあるが、殆どの人は「あの足では無理だろうな」と、霧島有利と読んでいたに違いない。相撲は始まって見ないとわからない。珍しくやや腰高で前のめりの立ち合いだった霧島、勢いよく突っ込んで行ったのは良いが土俵際まで下がった安青錦の肩透かして転がされた。安青錦が2敗で単独トップとなり、霧島・熱海富士・尊富士・獅司が3敗で並んだ。実況中継アナウンサーの「霧島はもう横綱にはなれない」とでも言うような囁き立て方は、ただけでない。良い時には騒ぎ立て、悪くなると陥れるような報道の仕方は無礼である。過去にも何人かの力士がこの被害者になっている。「静かに観察して、15日間終わってから、結果を正しく伝える」ことに徹すべきではないか。

と思っていた矢先、熱海富士が豊昇龍を破って10勝目を上げたとたんに「熱海富士は来場所大関取りになる」と騒いでいた。先読みばかりして、先手先手と騒ぎ立てるのは……？

- 十四日目：3敗同士の対決、熱海富士・獅司戦はあっさり熱海富士が勝った。獅司は立ち合いの下手な右への変わり身で体制を崩して、熱海富士の思うつぼというところとなり、3敗に後退。安青錦は痛めた足を軸にすることはできていなかったが、尊富士を相手にさほどの低さではない腰の位置で寄り切った。かいな力で勝ったように見えた。

12勝2敗＝安青錦、11勝3敗＝霧島・熱海富士と、3人に絞られた。

- 千秋楽：本割では心配した通り、熱海富士の前進パワーが炸裂して、安青錦を土俵外へ運び去っ

た。琴櫻を破った霧島と安青錦・熱海富士による三人による優勝決定戦になった。
大方の予想を覆して、安青錦が連勝して12勝3敗の優勝を手にした。あの足の状況で、これだけの勝負ができるという「凄い力」と「精神力の強さ」「気概の高さ」にはいささか驚いた。
殊勲賞は藤ノ川、敢闘賞は熱海富士・琴栄峰・高安、技能賞は安青錦となった。私見としては、バラまきすぎではないかなという感じもするのだが……。
来場所が面白くなりそうな終わり方だったことを喜ばなければいけない。

- 余談①:この文章を書きながら、二日目・三日目……と日を追って入力してきたが、
Toukame と入力しても「十日目」とならない。
Tookame と入力すれば「十日目」と出る。
Juunitime と入れても「十日目」と出る。
Nanokame でも Nanukame でも Nananichime でも「七日目」と出る。
- 余談②:このところ、新横綱・新大関を作ってもそれなりの成果が上げられない事例が目立っている。それでも「昇進基準の見直し」が必要だと言う声はどこからも上がってこない。
どうしてだろう？

以上